たび重なる変災に怒り

大砂で抗議集会

頑強に闘うことを決意

殉職した井上さんの地域である大砂地域分会主婦会分会では、たび重なる災害に加えて同じ分会の井上さん死亡の報に接して、分会員の間には会社の保安無視をにくむはげしい怒りがわき上つた。分会では直ちに、翌十二日午前十時から勝立分院前広場で「抗議集会」をおこない、組合員、家族が結集した。

集会には執行部からも参加し、災害の経過報告をおこない、地域分会からもこの抗議集会をひらくにいたつた経過が詳しく報告され、つづいて組合員の意見発表のあと抗議文を採択した。

とくに抗議文のなかには、災害発生にともなう責任と保安軽視の経営者の態度が強く追及されていたほか、保安対策の確立、保安無視を敢行している合理化の撤回が強調された。

大砂分会では、こんどとも生命と職場を守るために三池闘争の教訓を生かして、頑強にたたかい抜くことを決意し誓い合つた。

なお、これで七人の犠牲者を出すに至つたが地域分会、主婦会合同で抗議の行動を起したのはこの大砂分会がはじめてである。

カンパどっさり

三川で三千数個を配給

ズラリとならんだカンパかん詰のうれしい配布

三川支部では九日ひるすぎ、全国の仲間からおくられてきたカンパ物資の配給をおこなつた。この日、支部では事務所前にテントを張り、そこに全国の仲間からおくられてきたカンパ物資、とくに保存のきくかん詰ばかりをさきほどから集めていたのだが、このかん詰をズラリと並べた。

闘争中はもちろんのこと、就労後も三池へ寄せる仲間たちの暖かい激励は、つぎつぎとカンパにこめて三池へおくられてきた。各支部に送られてきた分だけでもぼう大な数量である。

三川支部では、これらの物資の中からかん詰だけを取りそろえていたのだが、ここ最近の分だけで実に三千個をはるかに超える量となつた。

事務所前に並んだかん詰は、レッテルの色もとりどりで、労働者連帯のたくましさ、美しさを反映させるかのように輝やいていた。ちょうどこの日、梅雨の前ぶれで雨となつたが、二番方で出勤する組合員や、一番方退勤の組合員たちは、このカンパ物資をながめてびつくりしていた。

支部ではひるすぎから各分会ごとに配給したが、遠い地域分会では三輪車をもつてうけとりに来るなど、思わぬカンパに感謝しながらうれしそうにうけとつていた。

ある組合員は「つぎつぎともらうカンパに何といつてお礼をいつてよいか全くありがたいことです。この全国の仲間の暖かい気持ちにたいして、私たちは会社の卑劣な差別をはね返し、必らず徹底的にたたかわなければならないと、固い決心をしています」ともらしていた。

この日は、うつとおしい梅雨の空模様もふきとばすようなふん囲気が三川支部前ではあふれていた。

団結謳う行事華やか

団結ソフトボール大会　四山

機械重要工事が優勝

四山支部の職場対抗団結ソフトボール大会は、六月四日優勝戦をおこない機械重要工事が晴れの優勝をかざつた。

こんどの大会に参加したのは二十三チームで、全然棄権チームのなかつたことは、団結大会の名を大いに高らしめた。

試合は二十三日から連日おこなわれ、それも入坑前、昇坑後に各方ごとに組んでやられたが、これまでのソフトボール大会といえばほとんど昇坑後であつたが、二番方などは入坑前に一試合やつて繰込むという熱の入れ方で、また三番方でもねむ気をふつとばして昇坑後に試合をつづけた。全く団結ソフトボールの名そのまま、試合を通じて団結をかためあつた。

試合成績つぎの通り。

一位　機械重要工事

二位　掘進い方

団結運動会

四山　緑ガ丘五地区連合

四山支部の緑ガ丘五地区連合（山吹、敬島、うぐいす、やよい、ひまわりの五分会）では、五月二十八日に団結運動会をおこなつた。

この日は、三川でも万田グラウンドで運動会、宮浦ではソフトボールを行なつた日であるが、五地区の運動会は山吹のグラウンドで組合員、家族があつまつてひらかれたものである。

運動会はみんなの意気が一つに合致して楽しくはずみ、とくに〝緊急動員〟などは満場の拍手と爆笑をかつた。

ひるごろから折悪く雨となつたがその雨の中でもひるまでプレーをつづけ、全プログラムを終了して団結運動会の成果を大きくあげて終了した。

（上）四山グラウンドで行なわれたソフトボール大会（下）山吹グラウンドでの楽しい団結運動会

各支部の行事

【宮浦支部】

五日　主婦会大運動会を宮山グラウンドで挙行した。

【四山支部】

四日　職場対抗ソフトボール大会優勝戦を四山グラウンドでおこなつた。

【本所支部】

各職場ごとに農村地区の組合員宅の麦刈り応援。

【港務支部】

写真サークルの作品展を組合事務所で実施中。以後各地域へ巡回展示する。

× ×

聲の限り

四山支部　蓮尾四郎

声の限り叫びたき思い抑へつつ今日も仂く排気坑道

食塩錠かみ砕きつつ飲む水のあまれば少し胸にも垂らす

帽燈の光うすれて何も見えず発破のけむりにしばし包まる

坑内では忘れていたる水虫の家に帰ればしきりにかゆし

ながながと作業のベル鳴りて追はるる如く切羽に向う

灯の下にビニールの紐を光らせつ妻内職の手提を編めり

闘いの中で知つた労働者の連帯

＝守山の女子組合員から便り＝

前号でお知らせした日窒守山のたたかいは、そのご地労委のあつせん案が出され、労資がこれを受諾して妥結をみました。会社のロツク・アウト、第二組合の強行就労にたいして一歩も引かず、組合員の半数以上が二十才前の若い女性という組合にもかかわらず、強くたたかい抜いたものです。

闘争終了後、現地の女子組合員から、支援オルグとして守山で活動した三池のオルグの一人三川支部の橋本教宣部員につぎのような便りが寄せられ、こんごの決意が示されています。

前略

私たちの闘いも第八波ストライキが六月一日十三時まででしたが会社側から六月一日から八日までの二回目のロツク・アウトの通告がありました。

私たちはロツク・アウトに対決するため、第九波ストライキとして六月一日の十三時から七十二時間、四十八時間おいて後段六月六日十三時から四十八時間ストライキの指令が出ていましたが、六月四日に地労委のあつせん案が出され、会社、組合ともこれを受諾して一応の解決をみることができました。

あつせん案の内容は

(1) 会社は第四次回答のほかに組合に七十五万円を支給すること。

(2) 労資双方は協議のうえ、可及的速かに新賃金を確定すること。

(3) 本争議に関連して派生的に発生したる事故等については出来得る限り労資双方とも誠意をもつて善処すること。

(4) 会社、組合はこんご正常な労資慣行の確立に努めること

以上四項目です。七十五万円は組合員一人一律一・五〇〇円位です。四、五、六月分で七月からの賃金は新賃金として賃上げの要求を行ないますのでこのあつせん案に不満もありますが、会社は第四次回答の外には、一銭も多くは出せないと頑迷な態度をとりつづけてきたのを、団結の力で打ち破り、六〇〇名足らずで新日窒の資本を揺すぶつたのだと、闘いの成果を認め合つています。

この闘いの中で統一と団結、労働者の連帯性がいかに大切かということが分かりました。

第二組（編集部注・第二組合のこと）もどぶねずみのように川から工場内に忍びこみ生産していましたが、思つたほどの生産はあげられなかつたようです。九日間のろう城をして、どんなに思つているでしょう。

女子寮内でも二、三日前に第二組に入つた人がいますが「敵よりも一日長く」ということが、どんなに大切なことかはつきり分かりました。

四日十四時から就労しましたがみんな闘いの疲れもみせず元気にがんばつています。

まだ、これから新賃金の闘いと組織を守ることが残されていますどんなに辛い苦しいことがあつてものりこえてがんばつて行きたいと思つています。

こんごともご指導のほどをお願いいたします。

てのひら

宮浦支部　高むく竜生

てのひらをひらくとき、
炭鉱に命を擦り減らした
父の匂いがする。

汗につぶれた
まめだらけのてのひらを動かすとき、
しわの伸びることのなかつた
母の顔が浮んでくる。

かなしいとき、
くるしいとき、
坑内垢のしみこんだてのひらを
みつめていると、
てのひらの中から
しあわせの歌ごえが拡がつてくる。

てのひらを
そつととずるとき、
子どもたちの
「父ちゃん頑張れ！」と
虹の国から呼ぶ声がする。

（S36・6・5）

〔おとなの童話〕

〝はたかぜ〟物語 ⑪

悲壮・組合歌齊唱

批判分子退場して刷新同盟を結成（35・3・15）

玄関の大戸をおしあけて、雪崩れるように、百余名の委員が退場してきた。批判分子である。

しかし彼らの退場があまりすばやかつたので、たちおくれて退場するきつかけを失つた二十余名の宮浦支部の批判分子が、去就に迷つてしまつた。が、彼らもまた、退場した主力を説得しにでかける—ということで、場内から出ていつた。

ついに三池労組はじまつて以来の、決定的段階にきたのである。

場内では期待と、不安と、空腹の数千名が、待機の姿勢にいつたが待てども待てども二十余名の消息ははつきりせず、そのうちに、苦しい時間の重圧を追いはらうように、誰かの発言で「組合歌」の齊唱が叫ばれた。

みんな仲間だ　炭ほる仲間
つらいときには　手をとり合おう

とことんまで神経が疲れ、もうみんな歌う力もないかに見えたが、いまやわれわれの血肉と溶けあつているその歌は、何の抵抗もなく自然に人々の口をついて流れ、たちまち壮重な大齊唱となつた。

みんなその歌をうたいながら、身につまされ、ぐつと胸にくる悲壮感に、暗涙をのむ気持だつたろう。

つらいときには、手をとりあうべき仲間が、いま組織として一番大事な瀬戸際に、われわれを裏切つて、会社側の陣に投じていつたのである。

ながい間、会社側と繋がつてきた主謀者たちにすれば、それは、千載一遇の好機ということであつたろう。しかし、彼らや職制にあやつられ、うやむやのうちに彼らの勢力に押しくるまれて持つていかれた、たくさんの善良な労働者の暗い将来のことを考えると、主謀者やそれにつながる一部扇動者にたいする怒りが腹の底からこみあげてくる気持であつた。

それでも、われわれは、伝統ある「三池炭鉱労働者」である。足許の石につまずいたからといつて明日への困難な道をあるく姿勢を崩すようなことがあつてはならない。

さて、私たちは八時すぎ、批判分子が集まつているという市民会館にかけつけたが、もちろんそこはものものしい「再建同盟」や「火をともす会」などいう右翼団体の警戒で、手のつけようがなかつた。昨日までのわれらの仲間は、いま完全に会社・職制の虜になつていた。

翌朝のラジオ・ニュースによると、彼らはその夜「刷新同盟」という実質的には全く「第二組合」にちがいない集団の、結成大会をやつており、そのニュースにつづいて萩川と若林所長が仲良く懇話を発表したことは、刷新同盟という集団の性質がどんなものであるかということを、如実に裏書きしたものだつた。

（述＝南本、記＝加藤）